

伊藤修先生の定年退職にあたって

経済学部長 禹 宗 杭

伊藤先生は、1999年、神奈川大学から本学部に転任された。以降、23年にわたり、教育と研究、そして大学運営に大きく貢献された。その内容については、長田先生の書かれた「猷辞」によくまとまっているので、それをご参照願いたい。ここでは、いくつかのエピソードを中心に、先生との思い出を述べさせていただくことにする。

偶然にも私は、先生と同じ年に本学部に赴任した。新しい環境に適応する間もなく、新任教員歓迎会が開かれたが、ペーパーながら「初任給が安い」と不満げに言って席を笑わせた私と違って、風格のあるご挨拶をされたことをおぼえている。以後、先生には「入社同期」として優しく接していただいたが、私としてはずっと畏敬の念を抱いてきた。

先生と私が着任した翌年の2000年に東京ステーションカレッジが開校した。先生は、多くの院生を抱えておられたが、個別的な指導を施しただけでなく、やがて同分野の教員や修了者を含め、「埼玉大学金融研究会」を立ち上げられた。これは、立派な研究コミュニティであった。この研究会を通して、優れた研究者が多数輩出され、研究成果も多く世に出された。一方、労働を専門とする私は、同分野の先学で後ほど学長になられた上井喜彦先生とともに合同セミナーを積み重ねていた。そして、その成果を引き継ぎ、同じく研究コミュニティとして「労働研究会」を発足させた。この研究会も今まで活動を継続しているが、「金融研究会」という柱があってからこそ、もう一つの柱として無事に続けられてきたといえよう。

二つの研究会同士が交流できるチャンスがあまりなかったが、その機会は突然訪れた。2019年末のことである。当時、わが学部のスタッフセミナーの一環として、『岩波講座 日本経済の歴史』シリーズを読む企画があったが、そのうち「労働と人口の章」を勉強する場を労働研究会とともに設けることとなった。その場に、金融研究会のメンバーたちが一緒に参加してくれたのである。むろん、伊藤先生ご自身、的を射る質問と鋭いコメントで議論をリードされた。夜の懇親会にまで続いた話合いを通して、多くのことを学んだ。何より、違う領域の人同士で議論を交わす「学際間交流」の楽しさを、身をもって感じさせていただいた。

こうして教育と研究をめぐる楽しい議論ができたが、大学運営をめぐる話が弾むことはあまりなかった。もともと実務的な性格のものだし、先生ご自身その類の話はあまり好まないこともあったのだろう。しかしながら、そのなかにあっても、ためになることをたびたび教えていただいた。典型的には、地方国立大学にも国の予算を適切に配分すべきことや、教育研究にあたっては大学/学部としてしっかりとした自主性をもつべきなどがそれである。教育研究を取り巻く環境が厳しさを増すなか、先生の見識がより大切に思われてならない。これからも健康に留意され、変わらぬご活躍を続けられるよう、祈念申し上げます。